はくさん

第1巻　第3号

もくじ

アメリカで見た自然と保護—その2—……四手井綱英…1
冬の季節風と植生—白山の植生3—……菅沼　孝之…4
白山麓のニホンザル伝承・2　薬に使ったサル
広瀬　鎮・水野礼子…6
山　日　記……8
図書・資料紹介……9
た　よ　り……9
表紙解説・高山の湿原……10

普及誌〝はくさん〟の編集方針について

〝はくさん〟は、白山地域の自然および自然保護の正しい理解と普及のため、ひろく一般のかたがたに読んでいただくことを目的とした普及雑誌です。

いろいろな内容のものが掲載できるようにしたく思いますので、各方面のかたに原稿をお願いするとともに、自然や自然保護に関心をおもちの方の投稿も歓迎いたします。

なお、普及雑誌ですので、行政的な問題や専門的な学術論文などは、おことわり申しあげることがあるかと思います。

（研究普及課）

アメリカで見た自然と保護　—その2—

四手井　綱　英

国立公園の管理と運営

私の見た3国立公園の何れもに管理事務所があり，道路は良く整備されていて，どこも亜高山帯までは自動車で行ける舗装道路があった。

自動車道については，アメリカのこの状態をそのまま日本へうつすことには反対である。アメリカの自動車は他に交通機関がないから必須要件であるが，日本はどこへいっても，鉄道，バスなどの自動車以外の交通機関があり，国立公園へ自家用車がはいれる必要がみとめられないのである。

特に西部になると，自家用車以外に何も交通機関がない。このため自動車路線はよく発達し，整備されている。

そのうえ，まだ私には理由は分からぬが，弱い植生といわれているモミ，ツガの森林帯の道路でも，両側の森林は日本のように次々と立枯れが拡がるという事態が全くといってよいほど発生していない。自動車道路の両側からビッシリと元気のよい丈の高い針葉樹林が残っているのである。しかもそで群落，マント植生なぞもあまり認められない。

東部のテネシィなどではエロージョン・コントロールに良いというので日本からもち込んだクズがマント植生どころか道路の両側の森林の林冠までのびあがり，おおいつくして，森林を枯らしている。

こうした林縁の処理問題は，今後もしばしば起る重要課題であろう。

道路の管理はたしかによい。私達がレーニア山へ登ったのは9月末で，もう亜高山帯には新雪があり10cm以上も積っていたが，管理事務所が早速除雪していて，交通には不便がなかった。道路情報はかならず国立公園の入口に掲示されていた。

管理事務所には小さな博物館が付随しているのが普通らしい。オリンピック山国立公園にも展示場があり，森林や動物のことがこぎれいに展示してあったし，レーニア山では別むねの博物館があり，登山史関係と，インディアンの関係の展示があった。

こういった展示場では写真，地図，いろいろな図書も売っている。これは自然保護団体や国立公園協会式のものが経営していて，その収益は公園の保護に使うということのようであった。

スモーキー山の入口には開拓時代の農家が再現されていて，ナラの木からオノで柾(マサ)コバを割るところの実演までしてみせてくれる。牛もチャンとかっていて当時の生活が十分に

レーニア山国立公園管理事務所
（この左側に展示館がある）

しのばれるものであった。

管理事務所には無料宿泊所があるが，一般には供用されていないようで，特定の国立公園関係者や研究者に使用を許可するらしい。私達もここに泊ったが，部屋の暖房と，炊事用の燃料は国でもってくれているらしい。そのかわり，寝具は一切ない。皆スリーピング・バックをもちこんでねるのである。

食堂やホテルが，施設区内にあるところもある。レーニア山などはホテルもあり，食事も宿泊も施設区内で出来るが，現在こうした国立公園内の民間施設は次第に公園外へ出してしまおうとしているようで，公園内には管理事務所関係とキャンプ指定地以外はなくなるらしい。

ネーチャー・トレールは説明にもよく気をくばってある。しかし多くの人の入るトレールでは小路外へ出るなとは書いてあっても，やはり路の周辺はかなり荒されていた。

スモーキー山のトレールでは協会が説明書を販売していた。

動物のなかでは，人にすっかりなれてしまったものがある。例えばスモーキー山のクロクマは何頭もなれていて，道路端に何台か自動車がとまっていると，必ずクマが出ているのである。これはちょっと行きすぎのような気がした。

レーニア山ではシカが時おり道端に出ている。アナグマの一種がホテルの床下に住みついているらしく，朝食をとりにいった時，顔を出していたが，1時間ほどしてかえる時にはもうどこかへいってしまったらしく，顔を出さなかった。朝食でももらえば山へ出かけるのかもしれぬ。

シカでも大型のエルクは人になれぬらしい，しかし管理事務所の周辺，ネーチャー・トレールあたりにかなりの大群が住みついているらしい。エルクなどのセンサスはレンヂャーがよくしているらしい。

国有林内の試験林地域にも滞在したのであるが，野生動物でよく出合うのは，小形の黒色のウサギと小形のリスである。これはどの林にでもいる。ウサギの穴は倒木跡や道端の崩れた所などに四通八達である。コヨーテは車の前を横切ったのをちらっとみた。

小鳥でよくみかけるのはキツツキであるが，餌が多いのか，日本のキツツキのようにカン高い音で木に孔をあけるのを聞いたことがなかった。

オリンピック山国立公園の展示館内の一例

レヂャー・レクリェーション

週末の自動車旅行者は大へんな量である。夏の休暇中であったせいもあるが，金，土，日などには特に多い。キャンピングカーに3種ある。ちゃんとしたキャンピングに専用の車，トレーラーとして乗用者でけん引するもの，最も多いのは小型のトラックに上乗せするものである。

こうした車には何れもベッドと便所，シャワー，炊事場，食堂ぐらいがコンパクトについているらしい。何のことはない。自然のな

かへ，生活具だけ文明をもち込むわけである。野生的な生活をするというのとはちょっと違った意味をもつように思えた。

アメリカ人は外でねることは好きで，私達がつかっていた20才前後の青年達もほとんど毎日誰かが屋外で寝る。グランド・シーツとスリーピング・バックだけをかかえて芝生や林内へ入って行くのである。小雨が降ってあわてて逃込んで来ることもあった。

国土が広いから，それほどキャンピングカーでごったがえすキャンプ地もなかったようであるが，自然のこの種の利用は日本に比べ著しく多いようである。

日本でもキャンピングカーがそのうちには普通になろう。

しかも週5日制が広く実施されるとなると，今のうちに，こうした大衆をどう処理するかを考えておく必要があろう。脱都会傾向が強まっている現在，好む好まぬとにかかわらず，レヂャーとかレクリエーションの大衆へのサービスは考えておくべきである。

自然保護ということと，自然利用，特にレクリエーションその他大衆の心身の健康保持のための利用をどのようにマッチさせ，さらに大衆の自然の科学的理解を深めること，これが，今後の自然保護の大きな課題である。

近頃，自動車でどこへでも行けること，大衆を楽々と高山へあげることがサービスと考え，また観光でひともうけしようと考えることがはやっているが，何れも間違った考え方であろう。自然へのアプローチは体力により差をつけるべきで，老人を2000 m以上の高山へリフトや自動車であげてやる必要はない。体力のあるもののみに許された自然があって当然なのである。レクリエーションが国民のためなら，公共団体が施設し，営利を考えるものであってはならない。

（京都大学農学部）

編集者コメント

前号につづいて掲載させていただいた，四手井綱英先生のアメリカ3国立公園の見聞録は，わが国の代表的な国立公園である白山の現状と比較してみるとき，自然保護に関して幾つかの指針を示していて興味ぶかい。

なかでも，アメリカでの国有林・国立公園のいずれもが，いわばオープン　フィールドミュージアム（野外博物館）として，自然科学教育に十分資せるよう管理・運営されている点は注目される。当センターが開設され，わが国の国立公園のなかにあって，もっとも恵れた条件下にあるといえるここ白山においてでさえ，不備の多いさが明らかとなる。歴史を無視しての比較は非現実でしかないとしても，アメリカの例は多くの点で，国立公園や自然保護，しいては自然と人間のかかわり方についての将来像を具体化してくれているように思える。

発足以来，半歳が経過した今，この間の普及活動を想うとき，反省の材料がおおかたであって，とてもアメリカでのようにはゆかない。迂余曲折は当初の方針（？）でもあったが，実際はそう悠長にしてはおれないことを，この記事は思い知らせてくれるものであるようだ。

冬の季節風と植生

—白山の植生3—

菅沼孝之

白山室堂センターから岩間道を辿り，大汝峰を巻くあたりはいやというほどハイマツの樹海を眺めなければならない。時によっては美しくかわいい雄花と雌花に接することができ，ほっとため息をつくのもこのあたりである。大汝峰を後にしてお手水鉢を過ぎると北竜ケ馬場は目の前である。この北竜ケ馬場におもしろい地形と，植生の分布が見られる。

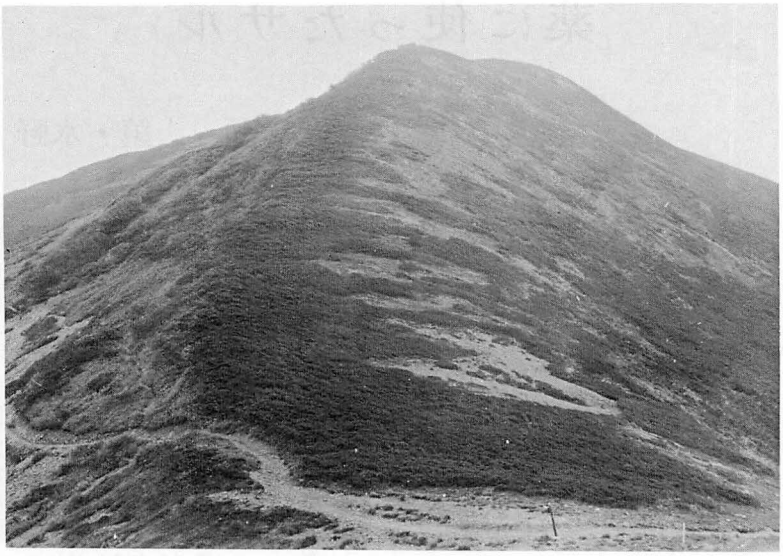
写真の歩道は向って右方は大汝峰へ，同じく左方は岩間温泉へとつづいている。この地の植生から推察すると，写真の右方からふきつける冬季の雪をもった風は，山の斜面にぶつかるようにして斜面をなぜて左方へ吹きぬける。すなわち，風衝地である。ぶつかり方が強いので右斜面にはほとんど雪は積らない。積っても強い風でふき飛ばされてしまう。雪は当然のこととして稜線に雪庇（せっぴ）を作って風下（写真の向って左側）の斜面に堆積する。風背地と呼んでいる。

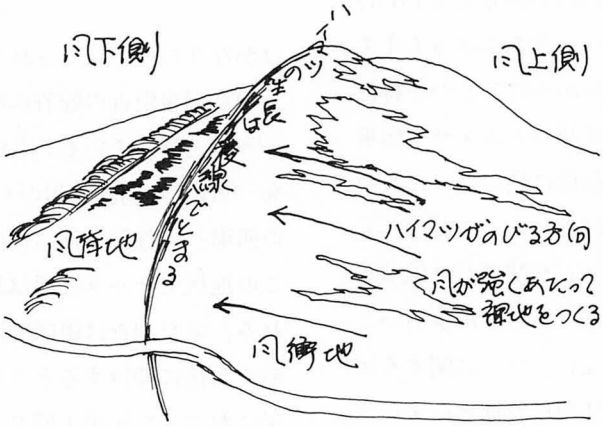
風上側にはハイマツが多いが，雪が嫌いなハイマツは冬の季節風が吹きつけるところに好んで生育する。しかしあんまり風あたりが強いところは風衝地に独特の低木群落や草本群落になり，風で石や土壌が動くところは裸地になってしまう。風あたりの強いところに生育するハイマツは文字どおり，地面にはいつくばるように風上側から風下側へのび，まるで散髪したての頭のように櫛目正しいようすをみせるのである。

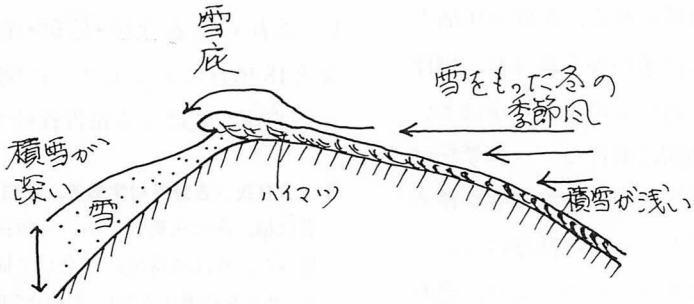
風下側にはどっさり雪が積るが，それが傾斜面であって，全層雪崩を起しやすいか，それとも表層雪崩のみであるかによって，植生が違ってくる。数年に一回でも全層雪崩を起すところでは，機械的に土壌がかきむしられるので植物は育たない。表層雪崩や，雪が動かないような地形のところは，もちろん植生がみられるが，それも，積雪期間の長短によってかわってくる。長すぎると裸地になってしまうし，短いと，雪以外の環境条件の違いによって，それに応じた植物群落がみられる。写真の風下側（向って左）の比較的濃いところは，雪があっても育つナナカマド類やミヤマハンノキを主とした木本群落で，うすいところは草本群落であり，ところどころに裸地が見える。平担地か，平担地に近いところでは雪田となり，独特の植物群落が見られる。白山では雪田植物群落の典型的なものは南竜ケ馬場に見ることができる。

夏山で植生の分布状態をよく観察しておくと，冬山で天候の急変などがない限りは失敗するようなことはない筈である。わが国の山岳地帯では年中氷雪で埋っているようなところはほとんどないので，環境の指標として充分に植生を使うことができるわけである。

（奈良女子大学・理学部）







フイルドノート（野帳）より

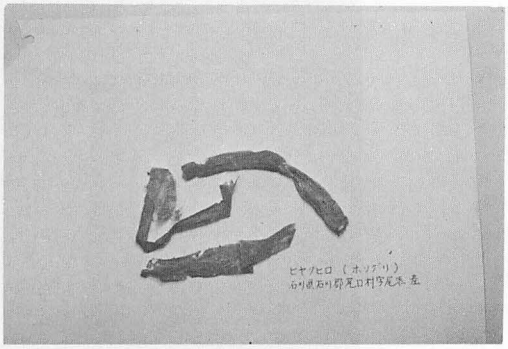
白山麓のニホンザル伝承 2

薬に使ったサル

広瀬　鎮・水野　礼子

わが国の歴史のなかで，日本人がサルとかかわり合いをもった過程には，地方地方の特色があり，同じ民間伝承でもその広がりや，把握のされ方には地域差がある。そのため場所によってはニホンザルという動物への感じ方，考え方は極端に異なる。サルのアニマル・ロア（動物譚）の成立の背景について考察をすすめるうえで，地域における伝承型の特色を把えることは重要である。

白山麓の住民におけるサルのアニマル・ロアに関する調査は1971年以降同地区を中心に聞き込みや，アンケート調査によってすすめられている。そこでわかったひとつの特色として，尾添川上流住民間のニホンザル伝承には，古くからの民間信仰に結びついたものがみあたらない点があげられる。これは，天狗伝承，猿田彦伝承とサルが関係した伝承が残されている白峰地区とはいささか事情がことなると考えざるをえない。サルに関する伝承の乏しさが，住民生活の孤立性とむすびつくかどうかは未だ不明であるが，白峰地区にせよ，中宮・尾添地区にせよ，出作り生活とサルとにかかわった口承が多く残され，畑作害に対しての「サル追い」の事例口承は多いのである。特に猟師間におけるサルの禁忌は共通しており，薬用効能などは滲透度が極めて高い。しかしながら，サルの捕獲については犀川上流域におけるサルへのたたり，恐れから，捕食・売買を全く避けたという事例とはかなりの差が見出されるものである。



百　　尋（ヒヤクヒロ）
ホソグリとも言い，ニホンザルの小腸を乾燥したものである。サルは安産の動物ということで，お産の薬として重宝にされた。

中宮温泉附近の蛇谷にかけられた渡り台をサルコと呼んでいる。索道に滑車をつけて台をつけ，人や荷物を川の対岸へ渡すもので，猿の餌場への往復に使っていた。この種の台をこの地区でサルコと呼ばれている点は注目される。未だ調査は組織的に実施されていないので今後に期待するところが大きいが，1973年におこった伝承実態アンケート調査に若干の回答をえているので以下に4例を報告したい。これらは衣食住・信仰・産業・狩猟・諺など18項目におよぶサルに関する伝承調査への自由記載による報告資料である。

1　SH氏〈吉野谷村字瀬波，昭和48年3月1日〉

○昔は槍，次は火縄銃，ついで猟銃を使ってサルを射った。昔は部落民に布令して捕獲を行ったという。サルを捕獲する時には訓示や指導をうけたそうである。

○ニホンザルを信仰の対象にする風習はない。
○ニホンザルをやさい坊，エッテコとも呼ぶ。
○サルの頭は脳に，腸は産前産後によく効いた。
○サルを動物園へ売ったという事を聞いた。
○サルの行商人があった。売買・交換をした事があると聞く。
○サルは私の部落では身体によいということである。肉は食す，実際に食べたことがある。
○ニホンザルが昔は住んでいたと聞く。部落ではサルを飼った例はみたことがない。

2　SK氏〈尾口村尾添，昭和48年3月14日〉

○捕獲方法は当地ではトラバサミと，主として鉄砲を使用した巻捕りであった。
○サルのことをカブラ，ぢいさん，エテコ，学校生徒といった。
○昔は商人により売買があって猟師は多少なりとも生活費に使った。
○食べたことがある。
○聞くところによれば，サルの頭を土でまるめ炭を使って黒焼きにしたあと，それを粉にして飲むと頭の鳴りとか痛みに効いた。またサルの胃(胆のう)をお産の時飲むと割合楽におわるというのは本当であったらしい。
○馬の腹痛の時，山村の部落では良い薬がなく，サルの胃（タンノウ）を飲ますと非常によく効いた。

3　TY氏〈尾口村字尾添，昭和48年2月24日〉

○勢子でサルの周囲を包んで火縄銃又は村田銃で射殺する。又犬を使って木に追いあげて射殺する。捕獲に際しての指示は，場所又は雪の状況を考えて村の猟師の最年長者が勢子と銃人の位置を指示した。狩猟で得たサルを銃を持った人は，勢子の1割増で配分した。
○サルはジーサン，学校の生徒，エテと呼んだ
○昔は，猟師はサルが金になるので頭，胃，肉，毛などを専門に商いする人がいた。
○サルの肉の一番おいしい時期は，初雪の降る頃で，〝秋ザルは嫁に食わすな〟といった。サルの肉を少年時代に食べた。時期がよかったのかとてもおいしかった。
○サルの毛皮はフイゴやカジヤ用のセキ板に張りつけるのに使われたもので，色々生活必需品と交換した。
○サルは組というて10～20匹と一緒になっている。1匹でいるのはハナレといって身体のどこかに傷をおっている。サルは皆グループになっているが何かの際に体に傷を負うと，皆が寄ってきて傷をかきおこしたり，なぶったりするのでグループにいる事ができず，はなれてしまって1匹でいるのをハナレという。
○サルの頭を黒焼きにしたのは頭痛のくすり，胃（タンノウ）はお産のくすり，百尋（腸）はお産の薬で嫁どもに重宝がられた。
○少年時代に村の猟師が捕えてきて飼育していた。ジャガイモ等を持って見にいった。とても可愛いものでした。

4　MN氏〈吉野谷村市原〉

○いとこに9ヶ月の早産の女の子がおります。今年中学3年になりましたが，小学生の頃身体が弱く薬を毎日のように服用したがよくならず，古老の話で「サルの頭」ではということになり，苦心してサルの頭を手に入れた。すごく高価であったが，父母は子供のためにと飯茶碗二ヶを合せ，その中に頭を入れて新聞紙にくるみ，その上に赤土をねりあてて田んぼの片隅に穴を掘り炭火で焼きあげた，いうなればむし焼である。2日目ほどで出来た頭をとり出して，すり鉢で粉末にしてそれを約半年の間少しずつ服用した。これが効いたのか今ではまるまると太って身体も元気でいる。子供も小さい頃サルの頭をのむと良くなるという気持が病気を直したのかも知れない。

尾添川にそってひらけた各部落においてのサルとの接触は，山樵作業者，出作り耕作者，猟師，それから開らかれた居住区の住民という形でなされ，サルも年々変化して行く白山山麓帯の自然環境との対応の中で，生活適応をくりかえし，種の保存をはかってきたのであり，ニホンザルの食性も出作り耕作地における栽培植物と深い関係をもちつづけて今日にいたっている。極めて部分的な資料と情報からの考察であるが，ニホンザルの民間伝承の残存形態からして，地域生活文化の閉鎖性と，雑多な民間信仰，俗信の入りこまない，伝承自体が交雑しにくいという自然地理的条件の中で，サルが「自然の生きものである」と

いう動物観の成立をこの地区にもたらせたのではないかと考えられるのである。また,今後はアニマル・ロアとしても，人々のサルという動物への感情は，特に白山山麓では，日本の他の地方においてしばしばみられる激しいサルとの対立関係，怖れ，うらみ，あるいは征服の論理がなぜ成立しにくかったのかを，自然史および社会史の背景からとらえねばならないと考えている。

（日本モンキーセンター）

山日記

あれほど美しく，天を焦すような紅葉に包まれた白山も，頂きから徐々に色あせ，白き神々の座に戻ろうとしている。

寒気せまる秋の夜に，春からの出来事をふり返ってみたい。あれは5月の30日ごろであったろうか，白峰からスキーヤーを乗せたヘリコプターが白山の頂きめがけて飛んでいった。次の日私は市ノ瀬で，赤とか黄色のスキーウェアに身を包んだ人達がバスに20人ほど乗って行くのを見た。つまりこの人達は，スキーを背負つて登り，リュックを担つて滑り降りてくる事をしなかった。リフトの代りにヘリを使った。こんな事でいいのだろうか。

夏休みに入って，家族でピクニックに来る人が目立つていた。別当出合の河原で弁当をひろげる人，百万岩のそばでバーベキューをやる人。水の音，透明な流れ，太陽の光，遠くに見える高い山，そんな場所が好かれているように思えた。山好きというか，静かな登山道を好む人は，中宮道とか釈迦新道など長い道を歩いている。ゴマ平ではネズミが住みついているという事をノートに書き残していた人がいた。こういう小屋で泊るだけの人は，なかなか愛情こまやかである。「ああ，本当にかわいいゴマネズミ」と書いている。もっとも，別の人は，「食料品をめがけ夜襲，熟睡できず。」と言っている。

秋になって，ナナカマド色付くころ，登る人は急に少なくなってきた。市ノ瀬から望む釈迦と別山の尾根が色付いてくるころ，トンビがゆうゆうと超低空飛行で舞う。そのうち電柱の上にちょんと止り登山センターあたりを向いている。何を見ているのだろう。

10月8日初雪あり，粉雪で全く積もらなかったという事。残雪にステップを切って，全員ピッケル持って登った観光協会の方々も先日下山しました。山は冬ごもりです。

今年室堂に泊った人は，26,591人で昨年より約3,000人ほど多かったそうです。来年もお花畑が多くの人を楽しませてくれるでしょう。

〈自然保護課〉

◇図書・資料紹介◇

信州大学教養部　自然保護講座編
「自然保護を考える」

わが国の大学にあって，ユニークな講座をもつ信州大学から，講義内容を骨子として出版されたのが，本書である。

これは，「自然保護という一つのテーマを，自然科学・社会科学・人文科学の諸分野から考察」しており，きわめて多岐にわたってわかりやすく述べられている。

本書の構成は，三部からなる。第一部は「自然は語る」で，自然の主張をヒトがどう聞きとるかが生態学的立場から解説され，第二部「自然の逆襲」では，自然の声を無視したためにひきおこされた問題点が述べられている。さらに第三部は「心を求めて」と題され，古来われわれの精神的風土となってきた自然，および自然観をさぐろうとしている。

ともすれば口先きだけになりがちな〝自然保護〟を，地に足のついたものとするために，本書の一読をおすすめしたい。

また，巻末にあげられた参考資料は，本書を一つのよりどころとして，〝自然保護〟をより深く考えようとする読者にとって，かっこうの手びきとなろう。　（松山利夫）

〈B 6版　424頁　共立出版
昭和48年刊　1200円〉

たより

冬季閉館を迎えて

7月4日の開館以来，悪い道路条件にもかかわらず，随分と多くの入館者を数えました。参考までに月別にしておきます。

7月	3,778人	9月	2,606人
8月	7,826人	10月	2,239人
		総計	16,449人

（10月25日現在）

この数字は当初の予想をはるかに凌ぐもので，一度は増刷した〝しおり〟も来館いただいた全ての方に渡らず，御不便をおかけしました。

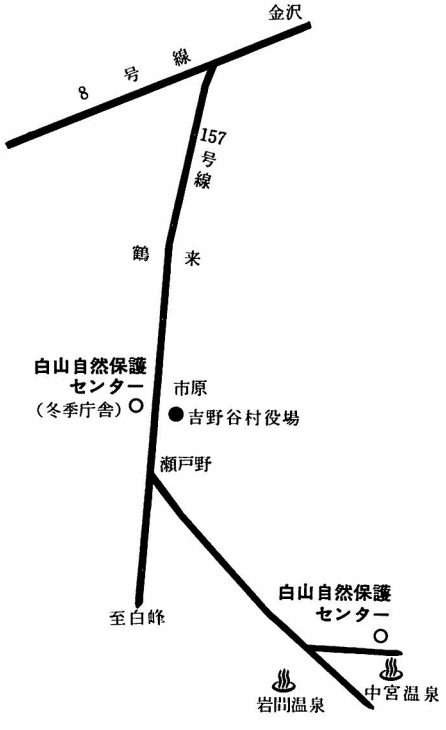
併設の自然観察園にあるジライ谷の野猿観察園はセンターから20分程の園路ですが，各月とも展示室入館者のほぼ半数にあたる多くの人達が利用されました。野生のサルを含めて，自然に対する来館者の関心が深いことを示すものでしょう。

利用者の多くの方々から，御意見や感想をお聞かせいただきました。これらをもとに，〝自然を考える〟場としてのセンターづくりに努めて参りたいと考えております。

10月30日をもって，雪深くなる蛇谷を降りることになりました。来春5月1日の開館を予定として，その間6ヶ月は冬季閉館となりますのでお知らせします。

閉館中は，冬季事務所を吉野谷村字市原（国道157号線沿）に開設して業務を継続いたします，センターへのお問合せは，こちらの方へお願いします，電話は吉野局(076195)の173番です。

展示業務は致しませんけれども，白山の自然や自然保護に関心をおもちの方は，冬季事務所へもお尋ね下さい。



表紙解説　高山の湿原

周囲を斜面にとりかこまれた盆地は，雪どけの水が集まりやすいため，地下水が高くなり，そのため湿地になります。又，春おそくまで雪が残るため，太陽の光を長い間受けなければならない樹木は生育することができず，草原となってしまいます。

これが「高山雪田植物社会」と呼ばれる，高山湿原なのです。

白山では，地形や地質の関係から，このような湿原は発達しにくく，公園面積の1％にもみたない28.4 ha にしかすぎないのです。その限られた場所は，主として南竜ヶ馬場，小桜平，北弥陀原などで，イワイチョウ，ショウジョウスゲ，ハクサンコザクラ，ハクサンオオバコ，コバイケイソウなどが群生し，北欧的景観を作っています。

また，ハクサンの名前のつく植物のふるさととして，学術的にも重要な場所でもあるのです。

地形と，地質，風，雪，日照時間などの復雑な関係の限られた条件の中で，これら多数の植物は，やっとの思いで生きているのです。

〈四手井英一〉

■ 編集後記 ■

本誌第3号をおとどけします。

落葉を済ませた稜線のブナ，その後方に雪で化粧をはじめた嶺みね，奥深い山やまは既に冬の装いをととのえた。少しおくれて，蛇谷の紅葉は，いまがピーク。渓谷の両岸は錦の屏風。贅沢な晩秋に，詩情（うたごころ）も不思議でない，この数日です。

冬季庁舎への移転を直前にひかえ，あわただしさが勝った数日でもあります。半歳のち，蛇谷に雪が消える頃には，またもどるはずです。雪深い様子をみてとれないのを残念がる編集子も居るのですが。

次号から6号までは，したがって，移転先の里村からおとどけすることになります。発刊を重ねるにつれ，普及誌の編集方針と実際との間にギャップがあるのではと，気懸りでなりません。誌者諸賢の御批評や御意見が待たれる所以（ゆえん）です。

相変らず，調査研究委員会の先生方に依存した編集ですが，読者の皆様から寄せていただける原稿にもスペースを用意してございますので，是非ともどうぞ。

〝はくさん〟誌上で読者の方々が意見交換をなさっていただけるほどになることを，編集者一同がねがって居ります。

はくさん　第1巻　第3号

発行日　1973年10月20日
発行所　石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮
印刷所　株式会社　橋本確文堂